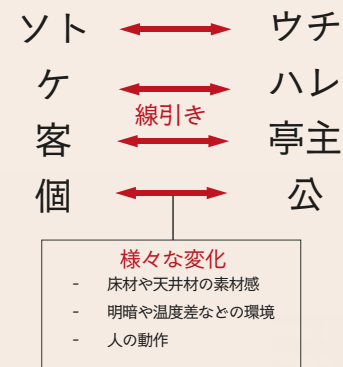


所作の線

— 人の動作に伴う境界を読み解く —

日本建築における境界

境界のない建築、可変する空間と称される日本建築の中にも確かに境界は存在する。しかし、それは壁や建具で仕切られた明確なものではなく、素材感や光・温度などの環境、そして人の動作などによる意識の中の変化によって線引きされていると考える。これらの変化が、「ウチとソト」「ハレとケ」などに境界線を与えている。



不便を伴う

近年の住宅は、バリアフリーが主流となりつつあり、人が不自由なく過ごすことができる寸法に規格化されている。しかし、日本建築には、障害物となるような場所がいくつも存在する。特に茶室では、身長よりもはるかに低い建具などは身長に負担を与える程のものもある。このような負担となるようなものをバリアではなく**境界**ととらえ、その動作を建築を体感するための**所作**だと読み換える。場を点々と移動し、一つの視点からでは得ることのできない空間の質の変化が一つの「和」の表現であると考ええる。

茶室における所作の線の例

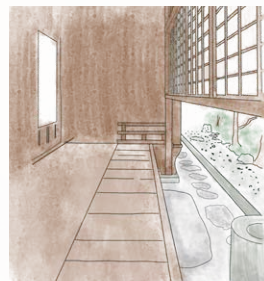
躡口

標準的な高さが670mm、幅630mmほどの客の出入口。身を縮めて茶室へ入ることで空間の広がり演出する。



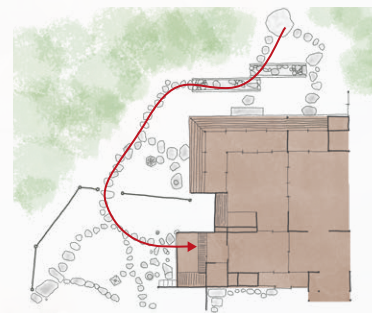
中敷居窓

上部を明障子、下部は開放し露地のみを見せる。あえて全てを見せないところは「花数寄」の考え方と似通うものを感じる。



露地

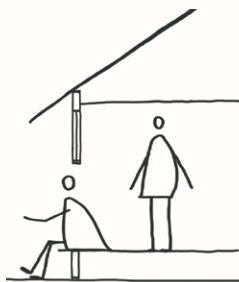
露地口から茶室までの道程。腰掛、中門、蹲踞などで構成されており飛石が道しるべとなる。露地を歩くことで、世俗を脱し茶の世界へと導く。



「所作の線」を引く

立つ・座る

立った時の庭の風景をあえて遮ることで座るという行為を発生させる。座ると軒や天井が視界から消え、建築の存在は薄れる。よって、同平面状であっても視点の違いで「ウチとソト」の知覚し方が変わる。



歩く

アプローチ空間を長く取り、歩くことによって室内に入るまでに気持ちを整える。パズリックからプライベートな空間へと徐々に意識を変化させる。



くぐる 潜る

欄間など身長と同レベルかそれより低い高さまでの障害物により無意識的に発生する所作。



また 跨ぐ

「敷居をまたぐ」という言葉があるように、外部から内部への空気の違いを強く印象づける所作。また、足元に注意が向き、視点は自然と下へと向かう。



上る・下りる

現代の玄関より高さのある段差は身体に負担を伴いながら意識に変化をもたらす。また、靴の着脱という所作が加わることが多く、日本人にとって境界を意識しやすい所作である。



計画敷地

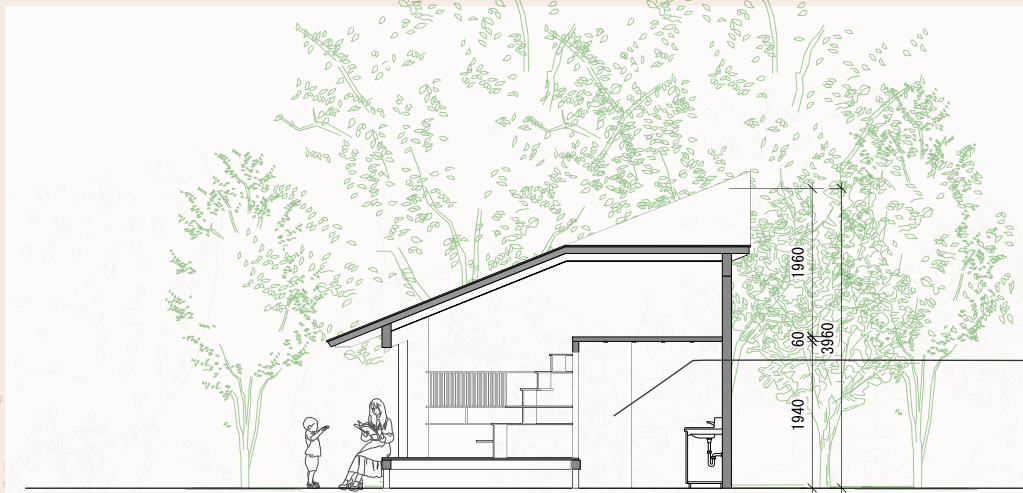
騒然と静寂

奈良県奈良市高畑町、若草山南西部の麓に位置する。周辺には東大寺・春日大社・奈良公園などがあり、外国人観光客で賑わっている。敷地は賑わいから一歩山へと入り込み、程よい静けさを纏う。



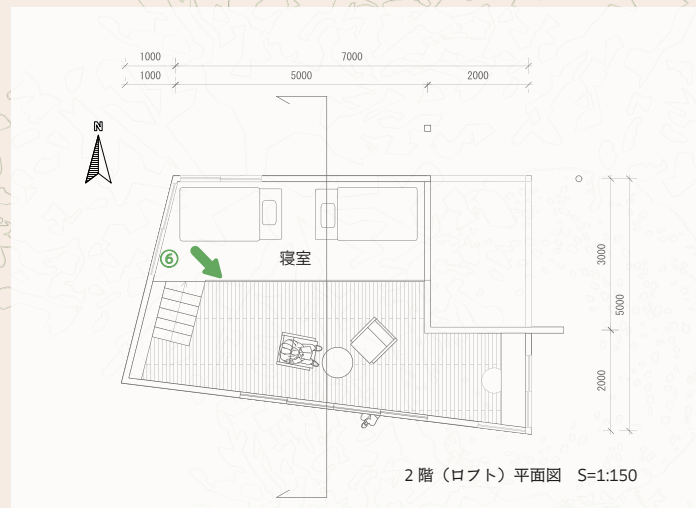
配置図 自然の露地化

高畑町から若草山への道を 50m 程進んだ場所、川沿いに宿泊施設を計画する。自然の間を縫うように蛇行させた露地を「歩く」ことで観光地と森の静けさとの対比を実感する。露地の中間部分にある橋は茶室でいう中門のような役割を果たし、プライベートな空間へ導く所作の線を引く。



断面図 S=1:100

居間から洗面へ 400mm 下げ、土間と同じ高さとした。これにより、茶室でみられる踊口のように身がかがめながら移動するという所作が生まれる。



一階平面図 S=1:50

居間から川を眺める。建具を外すとソトと接合し、南北に風が通り、川の音やにおいをウチへ運び込む。軒高を低く設定しており、立つと屋内、座ると屋外のように感じる。